


昭和46年2月1日 第3種郵便物認可
平成22年9月1日発行（毎月一回一日発行）
俳句雑誌 沖 第41巻第9号



沖

俳句雑誌[おき]

9月号



沖 発行所

花 卷

能村 研三

盆 僧

空を切る夜たかの軌跡夏果てて

羅須の意は修羅の逆とや雲の峰

※「羅須地人協会」という宮沢賢治の名付けし家あり

賢治館ふくろふ灯の涼しかり

マルチなす宮沢賢治秋澄めり

私の家の菩提寺は、東京谷中において孟蘭盆会の行事は通常七月に行われるべきものであるが、父がかつて教師であったため、この時期は期末試験と重なり、特別八月にしてもらっていた。そして父は俳人なので、秋の季語となるお盆の行事を梅雨が明ける前に行うことには、いささか抵抗感があったに違いない。このため、我が家では私が生まれる以前から、八月のお盆が定着していた。お墓に先祖の霊をお迎えに行くのも八月十三日、多くの会社がお盆休みに入って、東京都心は地方へ帰省している人が多いので車の量も極端に少なく閑散としているため車で移動するにも快適である。

今年のお盆は、昨年延壽寺の住職に就任された竹内ご上人自らが我が家に盆供養の法要においでくださることになった。これまでは、同じ日蓮宗で市川にある妙正寺（林翔先生の「唐辛子」句碑が境内にある寺）の赤羽ご上人に長い間、お経をあげていたのだが、何十年ぶりかに本寺からおいでいただくことになった。竹内ご上人は、四十代で中山法華経寺の百日の荒行を五回もさ

出水めくイギリス海岸 熒けい気きかな

自性院

※賢治の詩「春の修羅」に「北上川は熒氣を流し」とあり

高弟に守もらるる句碑や夏惜しむ

孝女なる副住職は爽やかなり

花巻農高生徒による鹿踊り

地を叩く鹿のささらの涼気かな

鹿脱いで上気が若き夜の秋

府中・大國魂神社

枝宮は酒を祀りて涼新た

れている方で、お父様も僧侶で宮沢賢治の研究者としても有名な方であるそうだ。私もつい先日、花巻の宮沢賢治記念館を訪ねたばかりであったので、宮沢賢治の話題で話が盛り上がった。

菩提寺の延壽寺は三百五十年以上の歴史のある名刹で、平成十二年に建立された、登四郎の

曼珠沙華天のかぎりを青充たすの句碑が境内にある。「沖」創刊の時に詠んだ句で、この句碑も日頃からお預かりいただいております。墓苑には父登四郎をはじめ能村家の代々の霊が祀られている。

何年間か、菩提寺には事情があつて一般の方が行きにくい状況にあつたが、今回来られた竹内ご上人によつて全てが解決され、私たちも好きな時に自由な気持ちでお参りすることが出来るようになった。

能村 研三



蒼茫集

濡れ羽色 千田百里

竹酔日富士に鉢巻雲湧いて
里山の胴震ひかも青あらし
業平忌をみながをのこ捨つる世ぞ
濡れ羽色の廃車の山や梅雨の月
ばら美姪三回忌しき天逝の忌の逮夜かな
いのち短かし手の切れさうな清水汲み

野良焼 池田 崇

吊る風鈴未だ一音も出さずなり
風死すや一途に小鳥地を掘れり
溺るるにどこか似てゐし立泳
十の香のして野良焼と言ふ日焼
余命など知るよしもなく朝の蟬
赤蝮少し高値で売られぬし

ほたる川 北川英子

螢火や彼岸此岸を行き戻り
上流にちちははの墓ほたる川
掌移しに螢貫ひし火の匂ひ
寝返りて青き森の香夏至の夜
冷泉家の正門開き星まつり
唇舐めて青水無月の雨の味

つひの雫 辻直美

昼月や蜘蛛の囿にある緯度経度
登校の高々かかげ捕虫網
老支度は夏旅支度より身軽
仮そめなら別れと言はず魂祭
夏の月さびしき町の刺青師
打水のつひの雫を切つてをり



花 街 宮内とし子

螢火の消えて木椅子と水の音
懐かしき和倉の碑文字草を引く
花街の日暮れてからすうりの花
奥の間の風よく通り藍切子
背開きの魚は加賀ぶり夏座敷
葎障子治部煮の旨さ言ひあへり

健 啖 千田 敬

推敲のいつしか昼寝タイムかな
誤植より放つ朱線や日雷
翡翠の水面切り裂く真珠光
楷行草決めかねてゐる夏書かな
毒舌の素は健啖メロン切る
饒舌の人に忙しき団扇かな

発 光 辻美奈子

蛩捕へし吾子の手は発光す
あまのがは無量大数おそろしく

傀儡に大き手のあり梅雨の星
貫はるる積木拭ひぬ花莫塵に
分度器の水平線や夏休
枝豆や母らしきこと言うてみし

冒 険 安居正浩

坂道の日暮れが似合ふ山法師
十葉を汚し気圧の谷通る
夏痩せて直言居上の勢ひ増す
鮎釣りの腰の高さに水流れ
冒険は地図に始まる雲の峰
凌霄花悪にたましひ売る芝居

小 声 荒井千佐代

菖蒲池と沼うやむやに隣り合ふ
厨より家々灯る花朱纒
金魚買ふ仰向きの死を想ひつつ
廃船に草伸び切つて日の盛り
大切なことを小声で滝の前
さるすべり死者の茶碗を割りて埋む

浦まつり 松本圭司

男波から大きき日昇る浦まつり
水となり光となりて遠泳子
沖もまたその沖もまた土用波
薔薇を買ふ心に色の欲しい時
白地着て湧きくる知恵の無尽蔵
心抱くやうに藁抱く水芭蕉

きらん草 大畑善昭

こんなにも平和な景を蟻地獄
妻留守にしてややこしき冷蔵庫
終り初物ですと到来夏蕨
これ引くと異な物が出るきらん草
擦傷をふやして三歳児の真夏
初蟬のやうやくによき声の張り

伯耆大山 上谷昌憲

伯耆大山北壁模糊と梅雨に入る
竹林の風を映せり青泉

二三滴醬油を鳴かせ岩魚焼く
鱈天をトッピングして梅雨茫茫
青無花果あの歯科医院もう行かぬ
七夕笹きんきらきんの乾きかな

魚ごころ 酒本八重

魚ごころあれば水着を小さく着る
父の日の古き万年筆いつぱん
梅漬けて昔をいくつ持つ身かな
築守の息しても水匂ひけり
ころがつて来る声涼し河鹿沢
話したき人みな遠し夏の蝶

終の地 藤原照子

くちなしの矜持や色の変るまで
高層のなき終の地や梅雨夕焼
海峡函館四町線越え来し宿や髪洗ふ
じやがいもの花や大地の色分ち
ばらの風透けり無人の懺悔室
朝市の烏賊泳ぎをり半夏生

漕ぎ出して 吉田政江

泰山木咲く朝光の台座とも
青梅雨の空降りてくる棚田村
漕ぎ出して空へ行けさう白ボート
夜振火のちろちろちろと眠くなる
都合よきときの父の座花ざくる
蜘蛛の子のはや一城を構へけり

あをあをと 田所節子

あぢさみより空あをあをと暮れてをり
そばに母住むやすらぎの月涼し
巻き鮎のアボカドの青涼しかり
山霧やひとすぢ滝の光りぬて
ほととぎす山の夜闇を昂らせ
涼しき尾曳いて「はやぶさ」燃え尽くる

別誂へ 久染康子

山岳派はた海洋派雲の峰
月下美人に別誂への植木鉢

滝行を終へし鎖骨に水溜めて
盆の道会ふ人ごとに会釈して
老人食に付き合つてゐる帰省の子
毒消で消えぬ毒あり言の葉も

百葉箱 森岡正作

梅雨深む百葉箱の孤立して
発想の研がるるまでを翡翠と
手品師にあるハンカチの裏表
石庭の石の喜び大夕立
山上の湖夕立の埧塙なす
波波波波の小躍り南吹く

水鏡 樋口英子

手花火やむかしは縁の下見えて
民宿の子についてゆく蛍狩
つまらなくなりて萍流れゆく
水鏡して直立の白菖蒲
老いゆくは澄みゆく茄子の苗植うる
少し駈けスクランブルの夕薄暑

潮鳴集

捕へをり

篠藤千佳子

爪弾きの音のついでと梅雨に入る
花卯木ぼんやり聞いてしまひけり
豆飯のさみどりといふ求心力
蜘蛛の囀の夕星ひとつ捕へをり
青林檎吾を磨いてゐる途中

箱振つて

甲州千草

青梅雨や野太き音で開く傘
墓こゑモノク口に写りけり
深梅雨や箱振つて本引き出しぬ
振り向くはさらさらの髪水を打つ
ほうたるにはや真暗な家のあり

かくれたき

栗原公子

かくれたき日よ鏝広の夏帽子
答でぬ問ひ十葉の根の長し
万緑やまづ踏み出してみること
途切れたる会話扇子のせはしなき
寝姿の嵩のうすさよ夏蒲団

ひんやりと

林昭太郎

赤ん坊の尻ひんやりと雲の峰
虫ピンの虫を貫く朝ぐもり
熱帯夜壁の中より水の音
梅干の塩噴く八月十五日
終戦日そよがぬ草と戦ぐ草

沖作品



能村研三選

少年に葎の匂ひ修司の忌
縄文の土器の線描涼しかり
肩に手に鳥呼ぶ男巴里祭
緑さす一枚板の卓の艶
少女の髪結ぶハンカチ空の色
六月の素肌になじむ藍木綿
産土をつつむ卵の花月夜かな
灯の匂ひ祠にこもり走り梅雨
たましひの結び目かたし朴花忌
晩年のひと日は重し雲の峰
水槽にぐつと手を入れビール買ふ
薄暑光乗つてみやうか人力車
転校の子を誘ひたる螢の夜
青りんごふたつに割りて仲直り
心太そこにゐた人もうみなく

神奈川

鈴木 浩子

市川

荒原 節子

神奈川

福島 茂

このセルも帯も頑固な父ゆづり
団子屋に生醬油匂ふ青葉風
町医者 of 代替りして白き薔薇
燧道の闇半円の若葉かな
枇杷熟るる千の棚田に千の空
峽植田パズルのやうに水奔る
賛美歌のハミング聞こゆ若葉径
由布を背に和名ゆかしき花菖蒲
極上の風をいたたくボートかな
青田風たつぷり吸うてあうん像
街騒の遠くに住みて薔薇咲かず
父の日の父と相傘退院す
真上より鳶の声降る青岬
相客の白靴まぶしカフエテラス
てのひらの風に流さる小判草

東京

能美昌二郎

千葉

清水佑実子

峰 幸子

沖作品 15句選評

*
能村研 評

縄文の土器の線描涼しかり

鈴木 浩子

縄文土器は紀元前一万二千年頃から紀元前三千年頃までの約一万年の間に造られたものだが、その美しさについては、画家岡本太郎や詩人の宗左近などが激賞している。ぐるぐると渦を巻きつけた装飾性など、まるで計算しつくしたような均整のとれた形で、古代の人のすばらしいデザイン性が窺える。作者もどこかの博物館で、縄文土器の美しさに魅了され一気に入に古代へのロマンを思い描いた。

六月の素肌になじむ藍木綿

荒原 節子

藍木綿でできた作務衣。江戸期によく使われていた藍木綿を復刻して、作務衣に仕立てた。素材は丈夫で、毎日着て、洗うことが出来るので暑い夏には最適だ。洗濯しても簡単にはぼつ

れることがなく、繰り返すほどに色が落ち、柔らかな風合へと変化する。六月に入ると梅雨空のうっとうしい日が続き、少しでも素肌になじむものが着たくなるものだ。

青りんごふたつに割りて仲直り

福島 茂

青りんごという素材が出てくるだけで、何か青春性の感情とあったものが現れてくる。この二人も若い男というより少年の兄弟を連想したい。りんごはまだ剥かれていない皮の付いたまま、丸ごとの林檎で、刃物を使わず素手で割られたりんごからは、果汁がほとばしり、甘酸っぱい青春性を感じさせる。ほんの些細なことからの喧嘩も、りんごの甘酸っぱさが仲直りをさせてくれた。

このセルも帯も頑固な父ゆづり

能美昌二郎

能美さんは、よく句会などにも着物で来られる方だが、お父様から譲り受けた着物もあるのだろう。セルは単衣着物地や袴などに使われる毛織物で、梳毛糸に人絹を撚り合わせたもので、肌触りがよく初夏に着用される。作者はこのセルと帯を身につけるたびに父親のことを思い出し、つくづく頑固な親父だったと述懐し、最近では自分にまでその頑固さが移ってきているようにも思えた。

峡植田パズルのやうに水奔る

清水佑実子

先日九州大会の折、別府を吟行したときの句。別府には、日本の棚田百選に選ばれた内成棚田がある。棚田の数は約千枚もあるそう、私たちも車を降りて水が上の方から伝わって降りてくる様子をつぶさに見ることが出来た。正にパズルのようで、このような悪条件の中でも人間の叡智と工夫がすばらしいものであると感じた。(以下略)